近世編

三〇疋）、牛（五一四疋）でほぼ同数であるが、まさに宿駅常備の馬疋と農耕牛の必要性が拮抗することの反映ともみられる。酒屋数が一〇軒で酒造高四三五石の数値は、船数一三四艘のそれとともに、この地域の元禄以前の商品生産・流通の在り方を推察するうえで示唆的である。

（丸山　雍成）

四　黒田長政の日光東照宮鳥居献納と可也山大石

日光東照宮の造営　大坂夏の陣後の元和元年（一六一五）七月、長政は嫡子忠之とともに帰国した。同年十一月にはひとり福岡を発して江戸へ参府し、翌二年正月二日に将軍秀忠に謁見、三月には江戸を発って妻の栄とともに駿府に赴き、家康の病状を見舞った。一方、在国中の忠之は、家康を見舞うために二月に福岡を発って駿府へ急いだ。四月十七日に家康が駿府に没すると、その後は父母と同じく江戸に赴き、六月帰国の途についた。長政はそのまま三年四月まで在府して将軍秀忠の上洛に随従し、五月この地で暇を得て帰国した（『福岡県史』通史編・福岡藩一）。

家康はその死後、すぐさま駿河の久能山に葬られたが、元和二年十月から日光山に東照社（正保二年（一六四五）に東照宮と改称）の造営が始まり、翌三年三月には早くも落成した。家康の一周忌を期して遺骸を久能山から日光山に移し、四月十七日に正遷宮の儀が営まれた（『東照宮史』）。

翌三年（推定）四月二十一日付で伊達政宗が今井宗薫に宛てた書状によれば、日光山に諸大名がそれぞれ金灯籠・石灯籠を思い思いに進上する次第を記した書立に、「中国・筑紫衆」といった西国大名まで一人残らず名前があり、この時、仙台にいて右の事態を知らなかった政宗は、至急に鋳物師に命じて金灯籠を作らせ、政宗が上洛する前に日光に届けさせることにした旨を記し、江戸にいた宗薫が便書で知らせてくれなかったことを「御恨存候」と伝えている（『仙台市史』史料編）。

五月十日付で柳生宗矩に宛てた政宗書状では、日光の灯籠の件は少し遅くても構わないとの知らせに「安堵仕候」と応えながらも、こうしたことは世上では早く聞きつけて対応するのに、政宗が出遅れてしまったことを「無念」とし、才覚のある者は知音衆から聞いて着々と準備したのだろう、と悔やんでいる（同前）。

同年五月に帰国した黒田長政は、日光東照社に石の鳥居の献上を計画した。右の政宗からすれば、江戸にいた長政は反対に

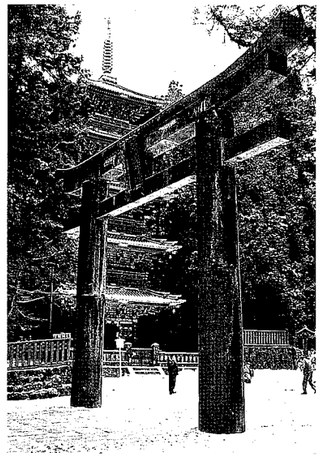

図4　日光東照社の鳥居

諸大名の動向について熟知していたことになる。ただ、情報を早くに得ていても、日光山から遥か遠い福岡から石灯籠・金灯籠を単に送っただけでは、政宗の懸念のように諸大名に出遅れてしまうかも知れない。そこで長政が考え出したのが、日本で最大といわれる巨石鳥居の献納であった。

ちなみに、長政夫人の栄は家康の養女という関係もあり、石灯籠二基を献納した（『御年譜集要抄』）。これも巨石鳥居と同様に、日光東照宮に現存する。

可也山の石出しと運搬　『筑前国続風土記』には、元和三年に黒田長政が日光山の東照社に石の鳥居を造立しようとして、可也山（親山）から石を取り出して鳥居をつくり、船に載せて南海路をめぐらし、日光御廟の前に立てた。石を取り出した所は師吉村の上のあたりで、そこから山の南にある辺田村の東に搬出して船に載せた。このほかにも、福岡警固大明神の鳥居や桜井与土姫大明神の鳥居も可也山から採り出したものという。

辺田村東から日光山まで石材を運ぶ経路については、『黒田家譜』一の元和三年の条に次のようにある。

長政日光山へ鳥居を建立し奉らんため、筑前国志摩郡親山にて大石を撰び鳥居に作らせ、大船にのせて南海を廻らし、武州隅田川より川舟に移し、栗橋まで利根川をのぼせ、古賀（古河）より陸地をやり、宇都宮を通りて日光山に着。九月十七日に御廟前に立らる。

『黒田年譜』も同様の説をとり、南海路を江戸に廻漕し、隅田川・利根川を遡航して上野古河より陸送、宇都宮を経て日光山に到り、九月十七日に鳥居を東照大権現の社前に建立したとする。

これに対して、江戸湾から江戸川・利根川・渡良瀬川・思川を遡り、乙女河岸（小山市間々田）から陸揚げしたとする説（大島延次郎「間々田乙女河岸と日光廟の相関性」）もある。しかし、『竹森家記』（九州大学付属中央図書館蔵）に、巨石を志摩郡「御山」において採取し、これを琢磨して大船に載せ、南海路をとって武蔵国隅田川に達し、陸路をとって「糟壁の駅」（春日部）に到り、さらに狭隘の道を苦心して運んだとする記述があり、乙女河岸での陸揚げに疑義も生じている（山村信榮「筑前黒田藩と石鳥居の奉納」）。

ここではいずれとも判断しかねるが、『竹森家記』は、日光山鳥居寄進の惣奉行を務めた竹森清右衛門貞幸の家に伝わる記

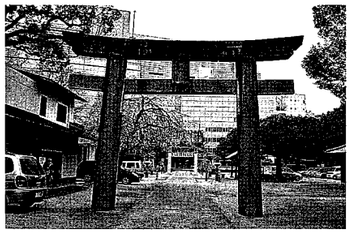

図5　警固神社の鳥居

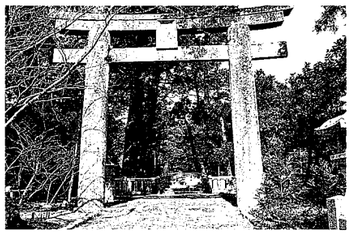

図6　桜井神社の鳥居

※第二章・第一節・四　黒田長政の日光東照宮鳥居献納と可也山大石（抜粋）

近世編　全309頁

近世は、豊臣秀吉の九州平定から徳川政権までの260年余を各方面から詳述しています。豊臣秀吉の二度にわたる朝鮮出兵と名護屋城築城は、豊臣政権を衰退させる原因となりましたが、地理的に朝鮮半島に近い志摩郡の人びとの生き方や「カヤ」に代表される地名など影響の大きさがうかがえます。

その後、志摩郡は徳川政権下の福岡藩領に入り、長く平和な時代となります。この間、黒田長政による日光東照宮鳥居献納、黒田忠之による桜井神社勧請など福岡藩との深いかかわりがありました。生活の中では、村の支配機構と産業、文化と宗教などについて豊富な史料と調査をもとに記述しています。

近世編　執筆者紹介

有田　和樹	（福岡地方史研究会会員）
伊藤　彰子	（福岡県地域史研究所研究員）
伊藤　和雅	（元西南学院大学非常勤講師）
内山　幹生	（九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究員）
河合　　修	（志摩町教育委員会社会教育課）
筒井　昭男	（糸島郷土民俗史研究会）
鳥巣　京一	（福岡市博物館学芸員）
中野　　等	（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）
日比佳代子	（明治大学博物館学芸員）
福田　千鶴	（九州産業大学国際文化学科教授）
前田時一郎	（糸島郷土民俗史研究会）
前田　　淑	（福岡女学院短期大学名誉教授）
松尾　晋一	（長崎県立大学）
丸山　雍成	（九州大学名誉教授）
宮本　雅明	（九州大学大学院芸術工学研究院教授）
守友　　隆	（九州大学大学院比較社会文化学府博士課程）
八百　啓介	（北九州市立大学文学部教授）
矢野健太郎	（元志摩町史編さん室嘱託員）
吉田　昌彦	（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）
吉田　洋一	（久留米大学文学部講師）